

奈良県立図書館報

うんてい

(うんてい復刊) 第6号

平成26(2014)年3月1日

マニュアルとは

館長 千田 稔

マニュアルといえば、近年ではIT機器に付けられている使用説明書のことをいう場合が多い。そのマニュアルのページ数が薄くなりつつある。考えてみれば、パソコンなどは、もともとペーパーレスを目的としたものであるのに、そのマニュアルが厚くては、それ自体、矛盾しているといえよう。

今までならば、痒いところまで手がとどくように、詳しく説明されていたマニュアルが、今どきは、薄くて、冷淡な素振りをしている印象を受ける。当然、IT機器類の使い方がわからないことが、いろいろある。どうすればよいのか。

機器を作った企業側には、それなりの戦略があるはずである。一つには、使用者が、

いろいろと試行錯誤しながら、使い方を探りだすのも、楽しみというものであろうと、突き放し型である。時間があればそれもよいかもしれない。

二つには、仲間たちが互いに使用方法の情報交換をやって、みんなの知識でマニュアル的なものを構築するのがよいではないか、という知識持ち寄り型である。

三つには、企業のサポート・システム、相談センターのような部署に電話で相談するという、電話問い合わせ型である。

使用者のおかれた状況や好みで決めればよいことであるが、将来、われわれのあらゆる分野の知識は、三つの方法の中で、どれが優位となるであろうか。

Contents

- ・ 巻頭言 マニュアルとは 1
- ・ 所蔵資料紹介 『官幣社明細帳附属図面』 2
- ・ 奈良のもの・ひと⑥ 「奈良のシカ」 3
- ・ 資料収集 新聞資料の紹介 4
- ・ コーナー紹介 「医療・健康情報コーナー」 5
- ・ 公文書資料紹介 「奈良県立戦捷記念図書館前史」 6
- ・ 地域資料紹介 『大和国著聞記:寛永七年高付』(『序中漫録』17:玉井家文書) 7
- ・ 図書館報で調べる レファレンス事例紹介 <第6回> 8
- ・ 情報関連設備について デジタルスタジオ・オーサリングルーム 9
- ・ イベント掲示板 10



『官幣社明細帳附属図面』(表紙)



「官幣大社大神神社 見取絵図」

【所蔵資料紹介】

◆『官幣社明細帳附属図面 (奈良県庁文書)』明治24 (1891) 年

明治初期、政府は宗教行政の執行のため神社や寺院の実態把握を継続して行っています。これを受けて県内でも明治12 (1879) 年頃まで、全国的に行われた社寺の統一的な明細整備の一環として、神社・寺院の悉皆的な調査と明細の整備が行われました。その成果は明細帳という名称を冠して、多数の簿冊にまとめられています。その後、明治24 (1891) 年にも前回の調査を補完するものとして付随した調査が行われました。紹介の簿冊『官幣社明細帳附属図面』は、官幣社を対象として調製された『明治二十四年調 官幣社明細帳』の附属資料として、春日大社ほか奈良県下の官幣社8社の社地実測図や境内名所旧蹟図などの図面類を収載しています。

右の写真は、同簿冊に収められている官幣社の一つ大神神社の全景を示す見取絵図です。奈良盆地の東南部にある大神神社は、延長5 (927) 年に完成した『延喜式』の神名帳に城上郡三十五座の最初に大神大物主神社として記されています。神体山である三輪山に鎮まる大物主神を祭神とし、古代から稲作豊穰、疫病除け、酒造りなどの神として、また大和国一之宮として人々の信仰を集めています。社殿は、本殿を設けず、拝殿の奥にある三ツ鳥居を通して祭神を拝するという古代の祭祀の様子を今に伝えています。絵図は、記紀にも記されている同神社の伝承や由緒を踏まえ、円錐形の秀麗な三輪山を中心に置き、拝殿に至る長い参道を描くことによって境内の特徴をよく表しているといえます。

図書情報館では、今回紹介した簿冊を含め明治・大正期の奈良県行政文書を6,695点所蔵しています。平成21 (2009) 年3月には、その資料的価値や重要性が認められ、県指定文化財に指定されました。一方、これらの簿冊は時の経過とともに劣化が進み、早急な保存対策が必要です。紹介している簿冊の表紙の右下には、「第一非常持出」というラベルが貼付されていることから、神社の基本的な公簿として業務の上で重要な資料であったことがうかがわれます。しかし、表紙の劣化状態が、現用を離れた歴史公文書が辿ってきた保管や取り扱われ方の歴史を如実に物語っています。

当館では進む劣化に対応するため、平成21 (2009) 年から継続して原本の代替資料を作製し保存の手立てを行ってきました。具体的にはマイクロフィルムとデジタルデータを作製し、館内での閲覧提供とインターネットを通じた資料の公開を行っています。明治以降の県の歴史と県政の足跡を知る上で重要であり、次世代に引き継ぐべき文化遺産としての奈良県行政文書は、当館の他の図書資料とともに、ハイブリッドな資料・情報提供のための主要な資料群の一つとなっています。

【参考文献】

- 国文学研究資料館史料館編『社寺明細帳の成立』名著出版 2004年
- 大神神社編『古代ヤマトと三輪山の神』学生社 2013年
- 虎尾俊哉編『延喜式 上 (訳注日本史料)』集英社 2000年

(鈴木 陽生)

奈良公園やその周辺でゆったりと佇む鹿の姿に、奈良のイメージを重ねることも多いと思います。古代遺跡や神社仏閣とともに、鹿は日常の生活に溶け込んで豊かな人と動物との景観を生み出しています。

◆神の使い

奈良公園一帯に生息する「奈良のシカ」は、和銅3(710)年、藤原不比等が氏神として春日大社を創建する際に、鹿島(茨城県鹿島神宮)から勧請した神・武甕槌命たけみかづちのみことが白鹿に乗って春日山に入ったという言い伝えから、神の使いとして大切に保護されてきました。

そして現代になり、苑池に群れ遊ぶ奈良の鹿は、餌を求める様が奈良の風光の和やかな点景をなし、都市部でもその生態を観察できる類のない野生動物の群集として、国の天然記念物に指定され、昭和32(1957)年9月18日の官報第9222号で公示されています。

◆シカにまつわる説話

『奈良の鹿「鹿の国」の初めての本』には、鹿の百態図など珍しい図版とともに、「奈良の鹿愛護会」の活動や春日大社との関わりと歴史などが詳細に述べられています。

また、『子供のための大和の伝説』などに掲載されている「十三鐘の石子詰」という話には、子供の投げつけた文鎮が当たって死んだ鹿と一緒に、子供が興福寺にある菩提院大御堂の庭園に生き埋めにされたとあります。そして石子詰になった時刻が六つと七つの間であったので十三鐘といい、その場所に母親がモミジの木(楓)を植えたことから、「鹿にもみじ」という取り合わせが始まったとされています。

『興福寺仏教文化講座要旨』第299回と第300回で語られている「奈良のシカ」の話は、春日大社の由来を始め、石子詰めの伝説に因んで創作された落語「鹿政談」や、奈良を訪れた宣教師の記録、浄瑠璃・歌舞伎などに登場する鹿など、非常に興味深い内容となっています。

◆絵図に見るシカ

当館ホームページの絵図展示ギャラリーで公開している『ならめい志よゑづ』は、幕末頃作成されたとされている絵図ですが、そこには大仏殿とともにたくさんの鹿が描かれています。

また、明治7(1874)年『奈良名所古蹟一覽之図』や明治24(1891)年『奈良名所細見図』、大正4(1915)年再版『東大寺供養會』などにも鹿が描かれています。

これらの絵図からは、鹿が古くからこの地に生息し、根付いていたことがうかがえます。

◆世界遺産とのかかわり

『世界遺産 春日山原始林－照葉樹林とシカをめぐる生態と文化－』で、平成10(1998)年に「古都奈良の文化財」として世界遺産リストへ登録された春日山原始林と現在の「奈良のシカ」との今日的な問題点が述べられています。

世界遺産である「古都奈良の文化財」と「奈良のシカ」が、今後も共存し次世代へと引き継がれていくことを願っています。



『東大寺供養會』一部抜粋

【参考文献】

- 奈良の鹿愛護会監修『奈良の鹿「鹿の国」の初めての本』京阪奈情報教育出版 2010年
- 仲川明『子供のための大和の伝説』大和タイムス社 1970年
- 興福寺教学部『興福寺仏教文化講座要旨』興福寺教学部 2009年
- 保井芳太郎版『奈良名所古蹟一覽之図』寧楽趣味の會 1874-1886年
- 阪田一郎『奈良名所細見図』阪田一郎 1891年
- 徳田祐義『東大寺供養會』東大寺々務所 1915年
- 前迫ゆり編『世界遺産 春日山原始林－照葉樹林とシカをめぐる生態と文化－』ナカニシヤ出版 2013年
- 「官報情報検索サービス」(2014/01/30 アクセス)
- 「奈良のシカ」の所蔵リスト<<知っ得!本箱>>
<http://www.library.pref.nara.jp/reference/honbako/shika.html>

(安井 敬子)

当館では、平成 23 年度に総務省「住民生活に光をそそぐ交付金」を活用して、未所蔵の新聞を遡って収集し、蔵書基盤の強化を図りました。その際に購入したのが、以下の 2 点です。

◆『京都日出新聞』（マイクロフィルム）

『京都日出新聞』は、現在の『京都新聞』の前身紙。その母体となったのは、明治 12 (1879) 年に村上天作が刊行した『京都商事迅報』です。浜岡光哲と鳥居誨が協力し、明治 14 (1881) 年 5 月に『京都新報』を創刊。その後、数度の紙名変更を経ながら、昭和 17 (1942) 年に至るまで休刊されることなく発刊されました。

この変遷の中で興味深いのは、『京都新報』の創刊当初は京都府会記事が中心だったのが、次第に外報欄を設け、外国ニュースの紹介を行っていったことです。次の『京都滋賀新報』では、京都局と滋賀局を置き、両府県の記事をフルに掲載しています。そして、「朝鮮事変」が勃発した際には連日社説を揚げ、さらに特派員を朝鮮に派遣し、明治初期の新聞界において、政論新聞としての声価を得ました。その後、紙名が『中外電報』から『日出新聞』に変わるにあたり、ローカルニュースを多くして小説や挿絵も取り入れ、親しみやすく明るい紙面になりました。明治 25(1892)年には巖谷小波が主筆で招聘され、在社中に『片時雨』など数編の小説や随筆などを執筆しました。明治 27(1894)年以降の新年号では、谷口香嶠、竹内栖鳳、上村松園などの京都の一流日本画家の筆による絵付録がついており、他紙の羨望の的となっていたようです。

『京都日出新聞』には、奈良県が堺県、大阪府に属していた明治 9 (1876) 年から明治 20 (1887) 年までの奈良県関係記事も数多く掲載されています。

<紙名変遷>

『京都商事迅報』→『京都新報』→『京都滋賀新報』
→『中外電報』→『京都日出新聞』

<所蔵期間>

明治 14 (1881) 年 5 月～明治 30 (1897) 年 12 月

◆『時事新報』大正期復刻版 2012(柏書房)

明治 15 (1882) 年 3 月に福澤諭吉が創刊。以後、慶應義塾とその出身者が中心となって運営されました。政治・経済面のみならず、当時を代表する文学者による連載小説や随筆・評論を数多く掲載。また、家庭実用記事を扱うなど、文化・文芸欄も充実しており、近代日本を考察するにあたって欠くことの出来ない重要な資料と言えます。

『時事新報』は、日本で初めて漫画を新聞紙面に掲載したことで有名です。特筆すべき漫画記者は、明治 32 (1899) 年に福澤諭吉が入社させた北澤楽天です。代表作としては、『田吾作と壘兵衛』、『茶目と凸坊(でこぼう)』、『楽天全集』などが挙げられます。<所蔵期間>

大正元 (1912) 年 7 月～大正 2 (1913) 年 6 月

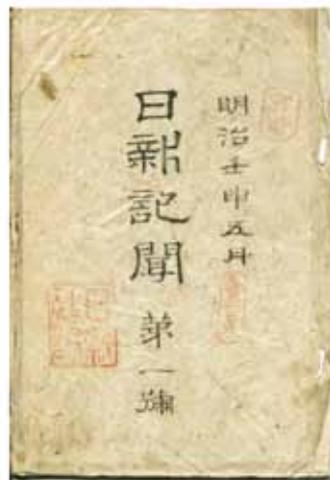
なお、当館には、明治 5 年 (1872) 5 月に奈良県内で最初に発行された新聞の『日新記聞』があります。体裁は半紙二つ折り、縦 22cm、横 15cm の木版刷りの小冊子。発行者は奈良油留木町の金澤昇平と東向北町の高橋平蔵で、日新報社(のち日新社)を設立して発行したものです。

内容は、記者自身の取材見聞、県の告示、布令、記者への書信、東京・大阪の新聞からの抄録、判決の写しなど変化に富み、ふりがなつきの文章ですが、東京や大阪の新聞紙面と比べても遜色ないものです。明治 4 (1871) 年から明治 8 (1875) 年にかけて京阪および県庁所在地で発行された新聞は「公布式新聞」と「啓蒙的報道新聞」に分けられ、公布式新聞は、冊子型で地方庁の公布物を中心とする記事を扱うものを指しました。『日新記聞』は、公布式新聞の形態でありながら、社会面ニュースを織り交ぜるなど、内容的には啓蒙的報道新聞でした。

なお発行者の金澤昇平は、自ら編纂した『奈良名所袖鑑』や自著『平城坊目考』『大和名所巡覧記』で奈良を紹介しています。

<所蔵期間>

明治 5 (1872) 5 月～明治 6 (1873) 年 11 月



『日新記聞』第 1 号

【参考文献】

●日本新聞協会編『地方別日本新聞史』日本新聞協会 1956 年

(西川 慶子)

平成 21 (2009) 年度に、医療や健康に関する図書を 1 か所に集めて「医療・健康情報コーナー」を設置しました。平成 24 (2012) 年度には「闘病記コーナー」も併設し、医療や健康に関する資料や情報を、幅広く収集し提供しています。

◆医学分野の専門資料

医学・薬学・看護学分野の事典・辞書類が豊富にそろい、医学・医療関連の専門用語や法律などの調べ物ができます。また、医師や看護師向けの基本医学書や診療ガイドラインなどの専門資料は、医学・看護学生の方や、病の概要、治療法などについて詳しい情報を知りたいと思う患者さんに活用していただけます。

◆健康や食事に関する一般図書

一般の方向けの医療・健康に関する図書は、病気全般、検査、病院ガイド、手術、食事、栄養管理、薬、漢方など、幅広くそろえています。これらは「内科」「外科」「産婦人科」「眼科」「耳鼻咽喉科」「歯科」「衛生」「薬学」の分野別に並んでいます。新しく入った医療・健康に関する図書も当コーナー内の新着コーナーに並びますので、既存の図書とあわせてすぐにご覧いただくことができます。

◆済生会奈良病院とのコラボ

済生会奈良病院の選定による図書もあります。医療の専門家がお薦めする図書をご覧ください。

また、毎月グループ研修室で開催される「医療・健康相談会」では、済生会奈良病院院長みずから、日頃気になっている病気についての疑問や健康管理のためのアドバイスなど、専門的な見地から親身に相談にのっていただけます。(相談無料・申込不要)



済生会奈良病院選定図書のコーナー



医療・健康情報コーナー

◆病名ごとに並ぶ闘病記

闘病記とは、患者さんが「病と向き合う過程を綴った手記」であり、同病の方にとっては医学書や医師からは得られない「生き方の情報」となるものです。エッセイや他の分類に散逸していた闘病記を 1 か所に集め、「闘病記コーナー」を設けました。

闘病記は「がん」「小児がん」「疾病」「脳」「障害」「心臓」「精神」に分類し、病名ごとに並べています。同病の方がもつ知識や体験を、病気とともに生きるための情報として、また心の支えとしてお読みください。病名別と書名順の所蔵リストもそなえています。

◆パンフレットなどの資料

がん予防、禁煙や歯科衛生など、健康促進をテーマにしたパンフレット類を置いており、ご自由にお持ち帰りいただけます。

超高齢化社会といわれる現代で、いかに自分らしく最期まで自立した生活を送るかを考えるうえで、生活習慣の見直しや病気の早期発見・早期治療は大いに有効です。

最近では、病気の治療においてインフォームド・コンセント(十分な説明による理解と同意)やセカンド・オピニオン(第二診断、別の医師の意見)が浸透しつつあります。新しく正しい知識や情報の入手ができるか否かは、誰にとっても身近で切実な問題です。

当館では、医療や健康に関する資料や情報の収集・提供に努め、みなさんの豊かで健やかな生活を支援いたします。

(川村 殉子)

－公文書資料紹介－ 「奈良県立戦捷記念図書館前史」

明治26(1893)年末、小牧昌業奈良県知事が退任し、翌年1月に古沢滋が新知事に就任した際に、県庁各部署が作った事務引継書には次のような記載があります。

奈良県第三課勸業係

一、図書観覧所

本庁内ニ図書観覧所ヲ設ケ、明治廿一年度ヨリ年々若干ノ地方税金ヲ以テ、農工商ニ関スル有益ノ図書ヲ購買シ、以テ県民ノ観覧ヲ便トス。

つまり、奈良県再設置直後から県庁内に、執務参考用ではなく、県民が観覧するための図書が備え付けられ、それが少なくとも5年間続いていたということです。当館主催の古文書講座で本書を講読してこれを知り、少々驚きました。『うんてい』2号掲載の「奈良県立図書館開館100周年 県立図書情報館までの歩み」などにもあるように、奈良の県立図書館の歴史は、図書の収集と提供、古文書類の保存、日露戦争戦没者などの顕彰を目的として明治43(1910)年に開館した、奈良県立戦捷記念図書館に始まるとされます。これらの設置目的は、現在の図書情報館の諸機能とも連続してくる部分が多く、本格的な県立図書館としての嚆矢であることには違いありません。しかし、その前史があったのです。

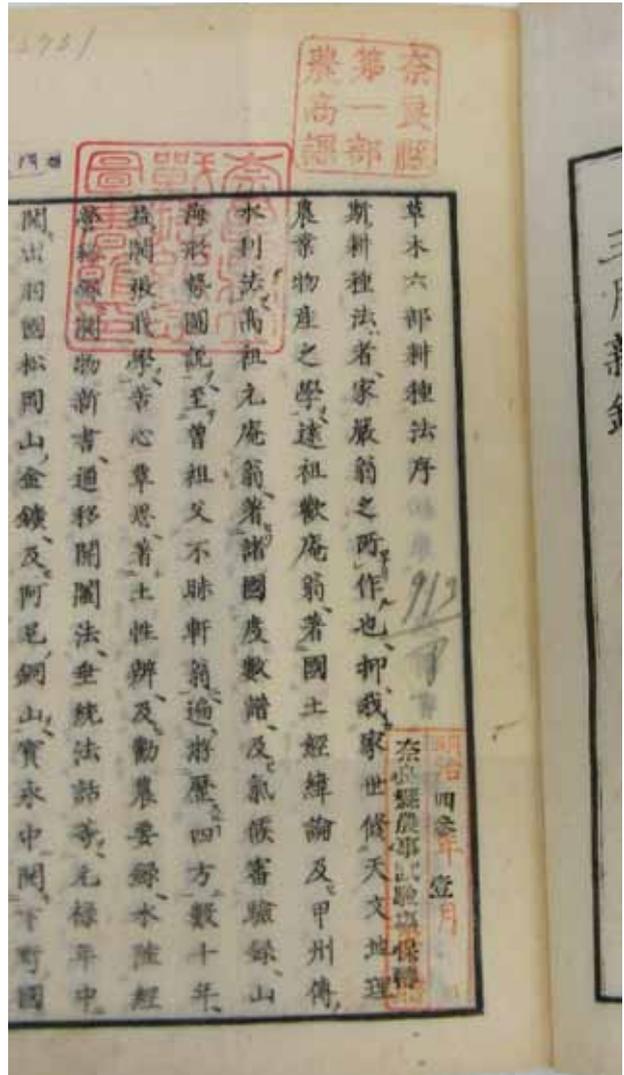
次に知事が交代した明治30(1897)年の引継書は、この観覧所に触れていません。また、当館で所蔵する他の諸書からも、観覧所の実態を示すものは未だ見出すことができないでいます。

ただ、明治23(1890)年の知事事務引継書には、第一部農商課の項目に「地方税勸業費ヲ以テ購入図書」として、61タイトルの図書名を記しています。その一点一点について蔵書検索をかけていくと、『報徳記』『泰西農業勸奨法』など約1/6については、現在も当館蔵書となっていることが確認できました。

これらの多くは袋とじの和装本で、右の写真のように、本文の最初の頁に、3種の蔵書印が押されているものが多く見られました。一つが上部の「奈良県第一部農商課」の印、一つが下部の追印されて「明治四参年壹月 奈良県農事試験場保転」となっている印、そして、左の篆書による「奈良県立戦捷記念図書館印」です。

「保転」は、全15冊からなる『日本国語大辞典』にも立項されていない言葉ですが、Web検索するとかなりの用例があり、昭和26(1951)年に名古屋大学農学部が設立された際に、東京大学農学部から譲られた本を「東大保転本」と呼びならわしてきたといわれています(「名古屋大学附属図書館報」171)。意味的には、ほぼ移管と読み替えることができるでしょう。

この蔵書印から、当初県庁内図書観覧所にあったこれらの図書は、明治28(1895)年農事試験場の開設に伴って移され、さらに明治43(1910)年の戦捷記念図書館開館に伴って「保転」された来歴がうかがえます。県庁図書観覧所などでの資料提供を、戦捷記念図書館の前史に数えるならば、当館蔵書の中で「最古参」の資料といえるのではないのでしょうか。



佐藤信淵述『草木六部耕種法』第1巻

【参考文献】

- 知事官房『明治二十三年 事務引継演説書』デジタル画像 86-88 コマ
- 知事官房『事務引継演説書及図書帳簿目録』デジタル画像 110 コマ

(佐藤 明俊)

近世社会の単位は村であり、村の経済力は村高で表示されます。こうした村高の確定は近世幕藩体制の基礎である太閤検地にはじまります。

大和では文禄4(1595)年の検地で各村々の村高が確立し、この村高は徳川政権支配下の時代にも踏襲されますが、現在この村高を明らかにすることができるのは、文禄検地帳の残っている約200ヶ村ぐらいです。江戸時代に入ると、幕命により郷村高帳の作成が命ぜられています。今日、村文書や旧家の所蔵にかかる文書・記録類の内に大和国の村高帳すなわち郷村帳を時折見かけますが、この内もっとも広く利用されているのは元禄15(1702)年の大和国の郷帳です。

ところが、元禄までは文禄検地による村高を基本にしながらも随分変化がありましたし、豊臣政権から徳川政権への移行で領主の変遷も著しいため、元禄以前の村高帳には興味深い要素を含んでいます。なかでも、大和国でもっとも古い村高帳は、奈良奉行所の与力であった玉井家所蔵で当館委託文書の『寛永七年高付大和国著聞記』(『序中漫録』17)です。奥書には「寛永七年午六月日」とあり、「右ハ元禄六癸酉年八月十一日春日社御用木を伐るため村々へ罷り出で候節、城上郡粟殿村庄屋九郎兵衛方ヨリ借用、十月二日繕い写おわるもの也」と付記しています。この記事から、与力であった玉井定時(1648～1720)が、元禄6(1693)年8月の春日若宮祭礼の御旅所御殿の用材準備のために出張したおり、粟殿村(現桜井市)の庄屋九郎兵衛から借用して写したことがわかります。これについて、大和国の村高帳を調査した歴史家の秋永政孝氏は、九郎兵衛家は現在も多数の文書記録を所蔵されているが、この原本は見当たらなかったと述べられています。しかも、表題、奥書ともに寛永7(1630)年と表記されていますが、この村高帳は寛永7年頃の状況を書いたものではありません。

記載されている領主の名からは、慶長14(1609)年頃の状況を示すものと推定することができます。例えば織田長益(慶長5年～元和7年迄)や福島孝治(慶長5年～慶長19年迄)、代官の大久保長安(慶長5年～慶長18年迄)の名が見えますし、2,000石の知行主の水野長勝が慶長14(1609)年11月に死去していること、同年10月に1,000石の知行主となった中井正清が掲載されていることからそのことがわかります。したがって、高付帳に示される領主を見ると、豊臣系の大名が配置され、大坂方の側近大野治長の所領5,400石が十市郡のうちに残っているように、大和国が完全な徳川氏の支配下に入っていないことがわかります。第一、大和国の最大の藩である郡山藩がまだ成立しておらず、徳川政権確立後の

知行割とは随分違ったものになっています。

また、この高付帳の記載は、領主本位の表示になっているので、1村が2人以上の領主に分割支配されている場合もあって、的確な村高や村数を正確に知ることが難しいですが、千百程の村があったことがわかります。村高の最高は矢田村(添下郡)の2,444石余、それに続き法隆寺村(平群郡)・柳本村(城上郡)・横田村(添下郡)・樺本村(添上郡)・超寺村(添下郡)・上里村(葛下郡)の村々が2,000石を超える村高を持っています。これに続き2,000石未満、1,000石以上の村は60ヶ村におよんでいます。

さらに、「右の外 三十四貫目 南都屋地子」と記載していることも注目されます。奈良の屋地子は寛永11(1634)年に免除されますが、この記述は、慶長期の奈良町の屋地子納税額を示しているからです。この時期の各町の屋地子帳では、1石当たりの銀との交換比率が14匁2分8厘なので、奈良町の屋地子34貫目は石高で表すと2,380石余であったことが知られます。

本史料は、徳川幕府草創期の大和の領地、郷村の石高、村の数などの基本的なデータを提供してくれる史料として、地名辞典などにも引用され各方面で利用されています。



『寛永七年高付大和国著聞記』

【参考文献】

- 秋永政孝「大和国の村高帳」(奈良地理学会『奈良文化論叢』所収) 1967年
- 大宮守友『近世の畿内と奈良奉行』清文堂出版 2009年

(大宮 守友)

◆一般資料から◆

Q：豊臣秀吉に天下を取らせた名軍師といわれる「黒田官兵衛」に関する本が見たい。

A：当館所蔵の主な資料をご紹介します。

<人物伝・歴史書>

- ・ 貝原益軒「黒田家譜」ほか（『益軒全集 卷之五』）
益軒全集刊行部 1910-1911 年
- ・ 林洋海『キリシタン武将黒田官兵衛：秀吉と家康から怖れられた智将』現代書館 2013 年
- ・ 渡邊大門『黒田官兵衛：作られた軍師像』講談社 2013 年
- ・ 諏訪勝則『黒田官兵衛：「天下を狙った軍師」の実像』
中央公論新社 2013 年
- ・ 小和田哲男『黒田官兵衛：智謀の戦国軍師』平凡社 2013 年
- ・ 小和田哲男『黒田如水：臣下百姓の罰恐るべし』
ミネルヴァ書房 2012 年
- ・ 西日本文化協会編『福岡藩 1（福岡県史 60 通史編）』
福岡県 1998 年

<小説>

- ・ 葉室麟『風渡る』講談社 2008 年
- ・ 葉室麟『風の王国：官兵衛異聞』講談社 2009 年
- ・ 安部龍太郎『風の如く水の如く』集英社 1996 年
- ・ 菊池寛「日本武将譚」（『菊池寛文學全集第5巻』）
文藝春秋新社 1960 年
- ・ 火坂雅志『軍師の門 上・下』角川学芸出版 2008 年
- ・ 坂口安吾「二流の人」（『坂口安吾全集 04』）
筑摩書房 1998 年
- ・ 池波正太郎「智謀の人－黒田如水」（『時代小説短編 1（完本池波正太郎大成 24）』）講談社 2000 年
- ・ 童門冬二『小説黒田如水』富士見書房 1994 年
- ・ 司馬遼太郎「播磨灘物語」（『司馬遼太郎全集 33-34』）
文藝春秋 1983 年
- ・ 吉川英治『源頼朝；黒田如水』講談社 1970 年

「官兵衛」という名前は通称ですので、図書館のデータを「黒田官兵衛」で検索するだけでは、見つけられない本がたくさんあります。ちなみに幼名「万吉」、初名「孝隆」の後「孝高」。48歳で剃髪出家後「如水」と名乗ります。また、元は「小寺」姓であり、主君が秀吉となった35歳で「黒田」と改姓しています。

辞書などで調べるときは、本来の名前である「黒田孝高」で掲載されていることが多いようです。資料の検索をする場合、平成26（2014）年のNHK大河ドラマで「官兵衛」の名が有名になる前は、「如水」のタイトルが多く見受けられますので、「官兵衛」「如水」の両方で検索されることをお勧めします。特に小説は名前だけでは検索できないものが多いのと、官兵衛の甲冑やキリシタンであったことなどを調べたい場合は、別の資料のご紹介ができますので、詳しくは図書館のカウンターにご相談ください。

（北森 亜由美）

◆地域資料から◆

Q：大安寺の僧であった「行教」について知りたい。

A：大安寺は、奈良時代に朝廷の手厚い保護を受けた「南都七大寺」の一つで、平城京においては筆頭のお寺でした。発掘調査から、その規模は現在の25倍ほどもあり、僧房は非常に大きく、僧侶だけでも約千人以上住んでいたと考えられています。

行教は、山城守紀魚弼の子として備後の国に生まれ（生没年は未詳）、南都大安寺行表の弟子として仏門に入りました。そこで『本朝高僧傳』では三論宗を、『南都高僧傳』では法相宗を学んだとされており、後に傳燈大法師位を授かっています。

行教の出自については、『古代文化』64巻4号（2013年）に詳しく書かれており、容姿は、石清水八幡宮を建てた際に別当寺として建立した縁で京都・神応寺に安置されている「行教律師坐像」に見て取れますが、行教の像か、その信憑性は議論があるところ です。

大同2（807）年唐留学の帰り、行教は、宇佐八幡宮に参籠した際に神託を受け、大安寺境内の一角にある僧房、自身の住まいである東室第七院の傍に八幡宮を建てました。その後、貞観元（859）年に清和天皇の宣旨を受け、山城国男山（京都府八幡市）に石清水八幡宮を建立したことはよく知られています。その業績などは、著作『石清水八幡宮護国寺略記』（『羣書類従』第一輯に収載）や大安寺関係資料、論文などで紹介されています。

【参考文献】

- 大安寺史編集委員会編『大安寺史・史料』大安寺 1984 年
- SP プロデュース編『知らなかった!もっと知りたい、大安寺』南都大安寺 2011 年
- 中野幡能『八幡信仰史の研究 増補版 上・下』
吉川弘文館 1975 年
- 池田源太[ほか]『古奈良 - 正統 - 研究調査』
共同精版印刷 1976 年
- 佛書刊行會編『寺誌叢書』第一書房 1978 年
- 今城甚造『大安寺』中央公論美術出版 1966 年
- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994 年
- 生井真理子「行教と安宗の出自について：石清水祀官系図と縁起の再検討」（『古代文化』64巻4号通巻591号）2013 年
- 井上正「京都・神応寺行教律師像」（『日本美術工芸』528号）1982 年

（松村 順子）

-情報関連設備について- 「デジタルスタジオ・オーサリングルーム」

図書館の情報分野に関連した設備のなかで、有料（予約制）で使用していただける二つの施設を紹介いたします。

◆デジタルスタジオ

スタジオ（奥行5.4 m×横幅4.7 m×高さ3.5 m）には、天井吊り下げ撮影用照明（色温度5500K 蛍光灯ランプ40W×4灯、16台）、ストロボ、レフ板、資料撮影台、商品撮影台、各種背景紙、三脚、マイクスタンド等を備えています。

スタジオ前室には、2005年11月開館当時のものですが、デジタルミキサーを使った多チャンネル録音・編集ができる機材、VHSビデオテープのアナログ編集や加工ができる映像編集用機材等を備えています。

現在の主な利用は、当館の資料の撮影、商品や人物の撮影、録音となっております。



なお、デジタルスタジオは、完全な防音施設ではありません。他の利用者へのご迷惑になりますので、過度に大きな音や振動の出る楽器等のご利用は控えていただきますようお願いいたします。

◆オーサリングルーム（編集室）

マルチメディア資料を作成できる機器を備えています。アトリエに設置のWindowsパソコンの機能に加えて、動画編集、DVD・blu-rayディスクの作成のほか、フィルム等のデジタル化、大判プリンターでの印刷ができます。

オーサリングルームには、

- ・パソコン2台(Windows7Pro SP1 64bit 8GB)
ソフトウェアは、EDIUSPro5ほか、VHSテープ、DV・miniDVテープのキャプチャ機器など
- ・パソコン1台(Windows7Pro SP1 32bit 4GB)
ソフトウェアは、Adobe Creative Suite 6 Design & Web Premiumほか、16mmからブローニーサイズ対応のフィルムスキャナ（Nikon SUPER COOLSCAN 9000 ED）、透過原稿ユニット付きフラットベッドスキャナ（EPSON ES-10000G）、大判プリンター（EPSON PX-9550）などを備えています。

大判プリンターでの印刷は、当館で用意しているロール紙（A1幅のマット紙、普通紙）がご利用いただけます。また、持ち込みのロール紙、単票紙（A4からB0ノビまで）のご利用も可能です。

なお、印刷にかかる費用は別途必要です。



現在の主な利用は、思い出の記録ビデオからのDVD作成、風景等の写真を思い通りの色合いに調整した大判プリント、会場に掲げる横断幕や看板等の掲示物の作成、自作の絵をスキャナで取り込んだ大判プリントとなっております。

各設備機器利用の際、不明な点がございましたら、2階カウンターへお知らせください。スタッフが適切な利用方法の説明等をいたします。

設備機器の詳細は、当館ホームページをご覧ください。

<http://www.library.pref.nara.jp/jyoho/index.html>

（植村 和彦）

イベント掲示板

■音楽・アート

図書館では、一昨年度から、地域の生涯学習や情報発信の拠点として、佐保川まちづくり塾を開講し、また「佐保川の春 音楽の日・アートの日」を開催しています。



SjQ ～音による創造のワークショップ

今年度の「音楽の日」では、メディア パフォーマンス グループ SjQ による「音による創造のワークショップ」をはじめ、昨年度に続く「大阪フィルハーモニー交響楽団団員によるクラリネット五重奏コンサート」、奈良県出身の若手チェリスト伊東裕さんのコンサートシリーズ「伊東 裕プレゼンツ～『奏春のとき』第2章～」、さらに、日独交流 150 年にちなみドイツ・チューリンゲン州の男声合唱団アルス・ムジカと奈良市在住のソプラノ歌手岡田由美子さんのジョイントコンサートなど盛りだくさんなラインナップで、音楽との新しい出会いを演出しました。



伊東 裕プレゼンツ～「奏春のとき」第2章～

「アートの日」では、全国のクリエイターが自分の思いのある「町」を冊子や映像で紹介する展覧会「my home town わたしのマチオモイ帖～近畿編～」

を開催しました。また、斑鳩町在住の映画監督横田丈実さんの最新作「加奈子のこと」上映会を行いました。



my home town わたしのマチオモイ帖～近畿編～

さらに、平成 20 年以來毎年来演いただいている奈良県出身で東京交響楽団首席チェロ奏者の西谷牧人さんのコンサートシリーズ「奈良にゆかりのある音楽家とのコラボレーションコンサート」の3回目として、奈良県出身の作曲家でピアニスト、ヴォーカリストでもある下口佳子さんとのデュオコンサートも開催しました。



西谷牧人・下口佳子デュオコンサート

そのほか、10 月には、ドイツの古典語学校カニジウス高校の室内管弦楽団による「ドイツ ベルリン カニジウス高校室内楽団交流演奏会 in NARA」を開催しました。日本での演奏旅行のラストコンサートでした。

いずれのコンサートでも、プログラムや作曲家、楽器、演奏形態などに関連するブックリストで所蔵図書や資料を紹介するなど、図書館という場所で開

催す意味を発信する取り組みを行っています。

さまざまな機会に新たな出会いと新たな情報への入り口を開くこと、図書情報館こそ、それにふさわしい発信拠点だと考えています。



カニジウス高校室内楽団交流演奏会

■ますます充実する定期イベント

8年目を迎えた千田稔館長による館長公開講座「図書館劇場」も、「奈良・大和の歴史的風景と美術」をテーマに、6回の講座を開催しています。



館長公開講座「図書館劇場」

また、奈良県出身の落語家 桂文鹿さんプロデュースによる図書館寄席も5年目。「花鹿乃芸亭（はなしかのうんてい）」として“語られる書籍”の醍醐味の発信を続けています。特に今年度は、昨年度に引き続き各回とも特別企画「文鹿がお客様に聞いて戴きたい、この一席」をプログラムに加え、ひと味違う落語会となっています。

相談事業も、済生会奈良病院瀬川院長による「医療・健康相談会」、行政書士による「法務無料相談会」、司法書士による「無料法律相談」を開催しており、所蔵関連資料の提供もあわせて行い、専門分野と図書館をつなぎ、気軽に相談できる展開を目指しています。本年度は、これに加え、中小企業診断士

による「体験セミナー&無料経営相談会」も開催し、多様なニーズを掘り起こしています。



中小企業診断士による体験セミナー

公立図書館では初めて開催された知的書評合戦「ビブリオバトル」も3年目となり、開催回数も30回を超えました。新たな本や人との出会いを楽しんでいただいています。

さらに、奈良県出身の童話作家 花岡大學の作品朗読会「花岡童話を愛でるつどい」、フランスシターの調べにのせて岩手・花巻の方言で語る「賢治の世界」、稗田阿礼ゆかりの賣太神社の藤本宮司と読む『古事記』輪読会など、多彩なラインナップで利用者の好奇心を触発しています。



ビブリオバトル

また、今年度は、人繋がりとお本を結ぶフォーラム「コミュニケーションブックレビュー&クロストーク」や、庭でニワを語り、新たなコミュニティを考えるアウトドアフォーラム「ニワ・プラス・トショカン」、さらに、「本の原点を探る2日間」と銘打ち、「聞き書き」を通じて介護民俗学を提唱されている六車由実さんと日常編集家アサグワタルさんを迎え、記憶を聞いて掘り起こし、書きとめて編集することを学ぶトークとワークショップを開催し、書物のプリミティブな姿を追体験する試みを行いました。引き続き多彩なプログラムが続きます。

企画展示・図書展示

さまざまな関係機関や団体、企業とタイアップして開催される企画展。社会の動向にも素早く対応し、所蔵資料をさまざまな切り口で紹介する図書展示。今年度もいろいろな仕掛けで、来館者を触発しています。

<主な企画展>

- ・5. 15 沖縄本土復帰記念日「沖縄県立図書館との交流展示—なつかしき沖縄～いま」(5/8～19)
- ・「東アジア現代アート展—アートで創る東アジアの絆」(6/4～27)
- ・奈良女子大学インターン学生による企画展「気になる奈良」って何?(7/23～28)
- ・「OCICA—石巻牡鹿半島 小さな漁村の写真展—」(9/10～29)
- ・「生誕160周年記念 明治の写真師ミヒヤエル・モーザー写真展」(10/16～27)
- ・「古都・奈良今昔寸描写真展～平城宮跡周辺・西の京・斑鳩の里～」(11/6～17)
- ・「平和祈念展 in 奈良」(12/3～8)

<主な図書展示>

- ・「奈良を愛した二人～入江泰吉と土門拳～」(3/30～4/25)
- ・「蜂起150年天誅組 既所蔵資料／北島男爵家関連資料展」(8/1～29)
- ・「祝! 富士山～世界遺産をめぐる旅 2013～」(8/31～9/29)
- ・「酒の嗜み—日本酒の魅力再発見—」(11/1～28)
- ・「クリスマス★クリスマス」(11/30～12/27)

編集後記

「うんてい」第6号はいかがでしたか?

今回は、誌面全体の構成を再考しました。図書館の施設案内や資料紹介、イベント記録などの情報を蓄積していけるように、連載と記事のシリーズ化をはかりました。

読者の皆様に毎回楽しみにしていただけるような様々な情報をお届けする館報にしたいと思っていますので、これからもよろしくお願いたします。

★図書館から全国に発信!★



奈良県立図書館創立100周年記念書籍『読み歩き奈良の本』のほか、全国から若者が集まる「自分の仕事を考える3日間」フォーラムから生まれた西村佳哲(働き方研究家)著『自分の仕事を考える3日間 I— with 奈良県立図書館情報館』、『みんな、どんなふうに通って生きてゆくの?—自分の仕事を考える3日間II— with 奈良県立図書館情報館』そして、シリーズ最終刊『わたしのはたらき— with 奈良県立図書館情報館』(弘文堂刊)が全国の書店で発売されています。また、一昨年から始まった「シゴトヒトフォーラム」もその1回目が『シゴトヒト文庫1』として書籍化されました。昨年度の第2回フォーラムも文庫2冊目として発刊されています。図書館情報館でのイベントから生まれたユニークな書籍の数々をぜひ手にとってみてください。

(乾 聡一郎)

奈良県立図書館情報館報 うんてい

(うんてい復刊) 第6号

発行日 平成26年3月1日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書館情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000

TEL. 0742-34-2111 FAX. 0742-34-2777